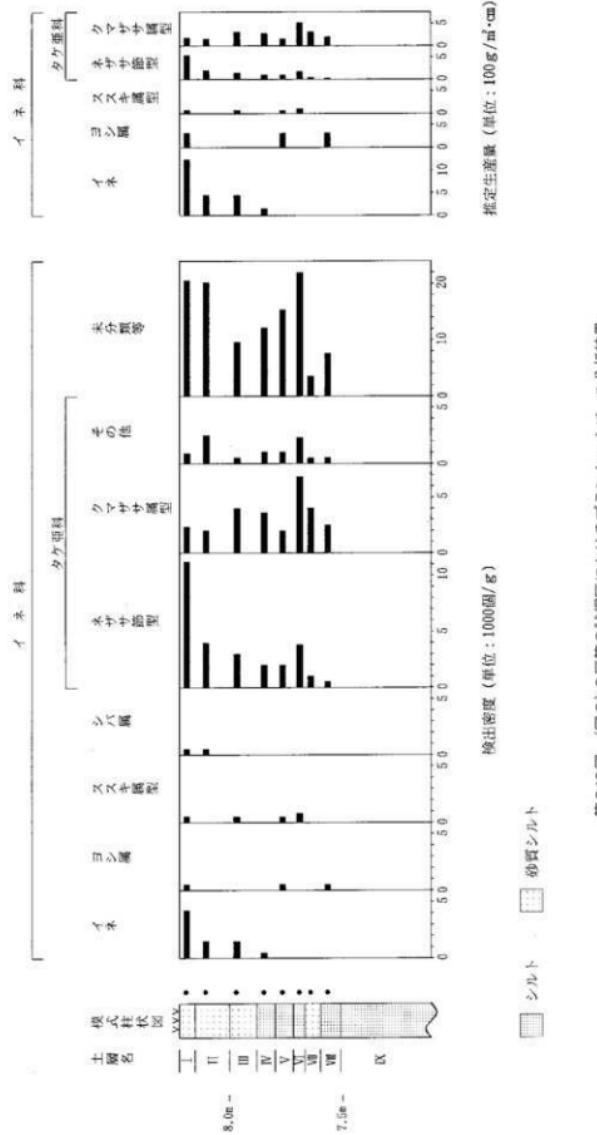
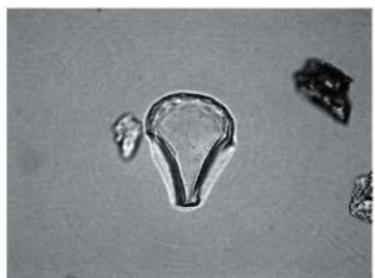


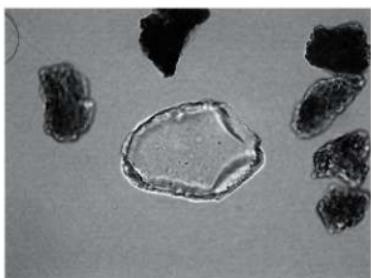
第339図 (図1) 2区第3試験区におけるプラント・オバール分析結果



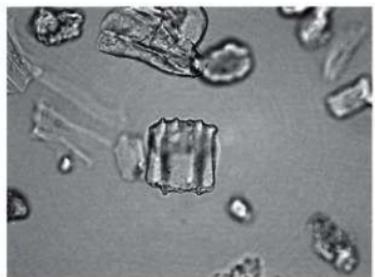
第340図 (図2) 2区第8試験区におけるプラント・オバール分析結果



イネ



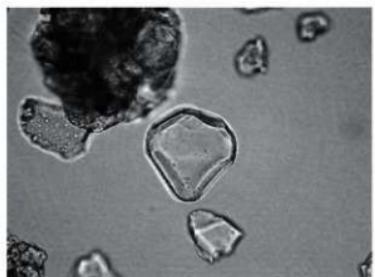
ヨシ属



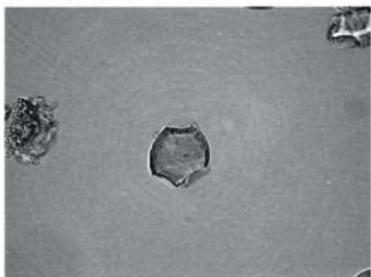
ネギサ節型



クマゲサ属型



スキ属型

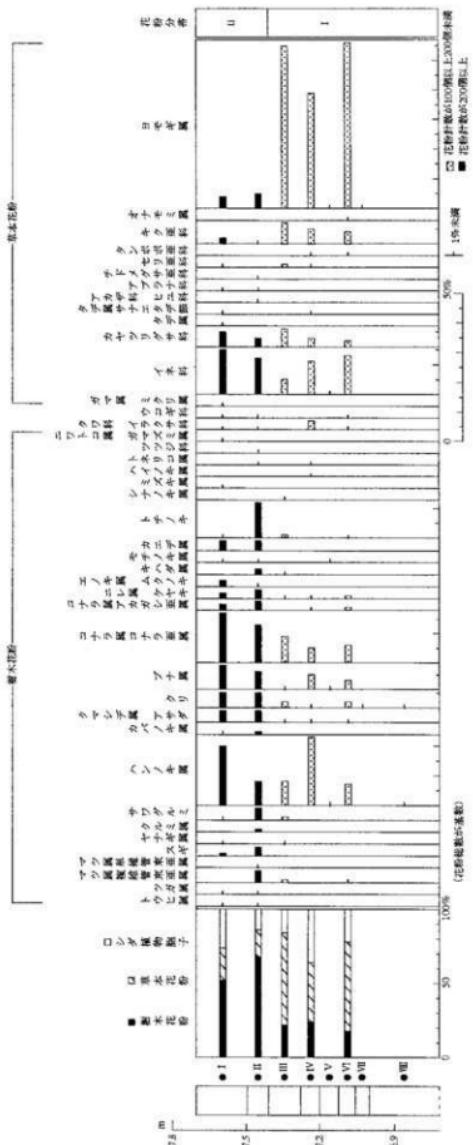


シバ属

プラント・オーパールの顯微鏡写真 ————— 50 μ m

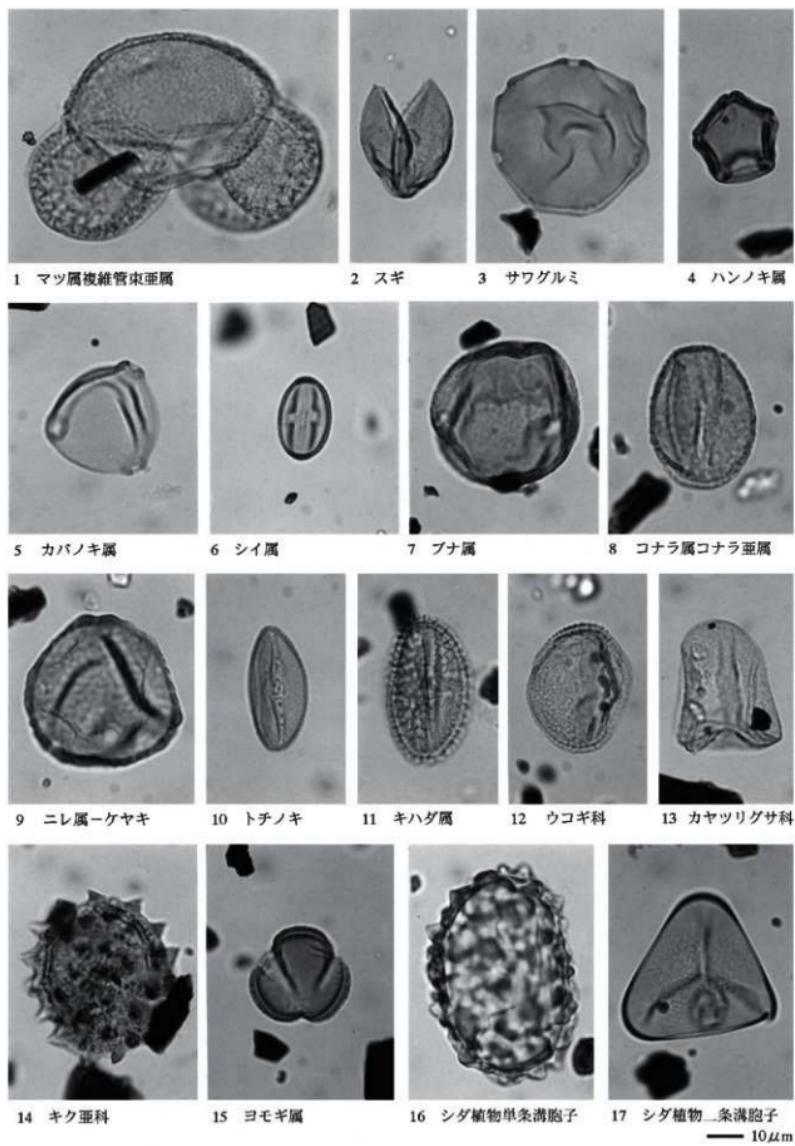
表2 長町駅東遺跡における花粉分析結果

学名	和名	2区第5試験区北壁							
		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
Arboreal pollen	樹木花粉								
<i>Picea</i>	トウヒ属	1	2						
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	2						
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属		13	2				1	
<i>Pinus subgen. Haploxyylon</i>	マツ属單純管束亞属		2						
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	3	11						
<i>Salix</i>	ヤナギ属	1		1					
<i>Juglans</i>	クルミ属		5						
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	2	14	2					
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	44	28	14	26	3	11		1
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	4						
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	9	14	1	1		1		
<i>Castanea crenata</i>	クリ	11	17	4	1		3	3	1
<i>Castanopsis</i>	シリ属		2	1					
<i>Fagus</i>	ブナ属	19	22	1	5	1	4		
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亞属	39	45	15	5		9		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanus</i>	コナラ属アカガシ亞属	4	10		1		2		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	5	11	1	1		2		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	5	1						
<i>Phellodendron</i>	キハダ属		16	1					
<i>Ilex</i>	モチノキ属	2	2				1		
<i>Acer</i>	カエデ属	6	9						
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	1	44	2			1		
<i>Tilia</i>	シナノキ属			1					
<i>Cornus</i>	ミズキ属		1						
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属					1			
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属		1		1				
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科			1					
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ワトコ属-ガマズミ属	2							
Arboreal- Nonarboreal pollen	樹木 草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2	1		3		1		
Araliaceae	ウコギ科	1	2				1		
Nonarboreal pollen	草本花粉								
<i>Typha-Spartanium</i>	ガマ属-ミクリ属	1							
Gramineae	イネ科	34	44	9	12	2	20		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	12	11	10	3		3		
<i>Polygonum</i>	タデ属	1							
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタ節	2			1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		1						
Cruciferae	アブラナ科	1	1						
Hydrocytoloideae	チドメグサ亞科		1						
Apiodae	セリ亞科	1		2	1				
Lactuconidae	タンボア科				1			1	
Asterodeae	キク虫科	4	1	13	5		6		
<i>Xanthium</i>	オナモミ属						1		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	10	16	97	43	1	85	1	
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単球胞子	58	46	26	50		36		1
Trilate type spore	三溝胞子	25	13	12	11		6		
Arboreal pollen	樹木花粉	157	276	46	42	5	34	3	2
Arboreal Nonarboreal pollen	樹木 草本花粉	3	3	0	3	0	2	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	66	75	131	66	3	116	1	0
Total pollen	花粉總數	226	354	177	111	8	152	4	2
Unknown pollen	未同定花粉	13	16	6	7	1	6	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	83	59	38	61	0	42	0	1
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)



第341図 (図3)長町駅東遺跡、第2区5試掘区北壁における花粉ダイアグラム

長町駅東遺跡の花粉・胞子



II. 長町駅東遺跡2B区下層の花粉化石群

吉川 昌伸(古代の森研究会)

1. はじめに

長町駅東遺跡は、JR長町駅の東側に位置し、地形的には沖積低地の西端付近にある。本遺跡からは縄文時代後・晩期や弥生時代中期の土器、および古代の竪穴住居が多数検出されている。縄文時代後・晩期の遺構は確認されていないが、周辺に居住城があった可能性も考えられている。そこで縄文後・晩期の周辺の環境復元および生業についての資料を得ることを目的に、花粉化石群の調査を行った。

2. 試料

花粉化石群の調査は、2B区下層調査区の西壁の12層準において行った。分析地点の地質柱状図と試料採取層準は後述する図3に示す。現地観察を行っていないため、ここでは堆積物および堆積状況の詳細な記載を示さないことから、それらについては関係する章を参照されたい。

2B区下層は大きく16層に区分され、各層は概ね水平に堆積する。堆積物は、最下部(16層)と最上部(1層)の砂層を除いては、主に灰色ないし褐色、暗青灰色粘土質シルトからなり、15、6、3各層で黒色粘土質シルトが層状に堆積する。6~8層からは縄文後期、3b層からは縄文晩期の遺物が出土している。

3. 分析方法

花粉化石の抽出は、単位体積あたりの花粉量を算出するため体積を測定後、10% KOH(湯煎約15分) - 傾斜法により粗粒砂を取り除く - 48% HF(約30分) - 重液分離(比重2.15の臭化亜鉛) - アセトトリシス処理(濃硫酸1:無水酢酸9の混液で湯煎7分)の順に処理を行った。プレラート作成は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分搅拌後、マイクロビペットで取りグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、花粉分析層準において有機物量と泥・砂分量について調査した。有機物量の変動については強熱減量を測定した。強熱減量は、るつぼと乾燥試料約2gの質量をはかり、るつぼを電気マッフル炉内に置き、750°Cで3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。泥含有量はシルト以下の細粒成分で、この成分の割合を乾燥重量百分率で算出した(表1)。

4. 花粉化石群の記載

2B区下層より産出した分類群のリストとその個数を表2に、主要花粉変遷図を図1に示す。出現率は、樹木は樹木花粉、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究会に保管してある。

分析試料の堆積物の特徴は、砂分の多い2b、15各層を除いては類似し、強熱減量は9.8~13.8%と全般に低く、泥質の無機物に富む堆積物であることがわかる。また、各試料には、第三紀植物群であるフウ属(*Liquidamber*)、ニッサ属(*Nyssa*)、メタセコイア属(*Metasequoia*)などの誘導化石が普通に産出し、さらに第四紀からの誘導化石とみられる化石も含まれている。しかしながら、全般に花粉の保存状態が悪いことから誘導化石を区別することが困難な試料も少なくない。図表には明らかに誘導化石と考えられる花粉は除いてあるが、一部試料には誘導化石が含まれている可能性も否定できない。

さて、産出傾向は、2層(2a, 2b, 2c)および4層で比較的多くの花粉が産出したが他の試料では少なく、特に

下位層準ほど少ない傾向にある。2a、2b、2cでは、落葉広葉樹のコナラ亜属が比較的高率に占め、クリ属を比較的多く伴う。他にハンノキ属が比較的高率に、ブナ、ニレ属-ケヤキ属、カエデ属、トチノキ属などを伴う。草本は低率で、ゼンマイ属やシダ植物胞子が多く産出する。4層も2層と概ね類似した組成からなり、ハンノキ属が高率に占め、コナラ亜属、クリ属、ブナなどが比較的高率に伴う。また、花粉の保存が悪いためクリ属近似種としたものも幾分多い。草本は低率でシダ植物胞子が多く占める。

表3、図2に1cmあたりの樹木花粉量および微粒炭量を示す。樹木花粉量は上位層準で増加する傾向にある。2b層で少ないので砂分が36%を占め堆積物が相対的に粗粒なためとみられる。微粒炭量はデジタルカメラでフレーバラートの顯微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのNIH Imageで面積を測定した。微粒炭は、6、3、2c各層で1434～2262ml/cm³と多く含まれる。これら層準は概ね遺物包含層と一致し、周辺で生業があったことを示す。また、花粉処理後の残渣の植物遺体は、2b層を除いては微粒炭からなり、炭化していない植物遺体は稀である(表3)。つまり、堆積物の黒色は主に炭化物により形成されていると推定される。

5. 長町駅東遺跡2B区下層の堆積環境および周辺の古植生

堆積物の特性に基づくと、14～2各層は概ね同様な環境で形成され、15、6、3各層の形成期には乾燥化していたとみられる。すなわち、分析試料の堆積物の特徴は、砂分の多い2b、15各層を除いては類似し、強熱減量は全般に低く、泥質の無機物に富む堆積物からなる。すべての層位の調査を行っているわけではないが、堆積物の特徴が類似するため14～2各層は同様な環境で形成されたと推定される。堆積物が有機物に乏しく泥質であることから、後背湿地などの比較的穏やかな環境で形成されたとみられる。また、植物遺体が炭化物を主とし、さらに樹木花粉量が下位に向かって減少し花粉の保存が悪いことは、炭化していない植物遺体や花粉の一部が分解されたためとみられる。つまり、黒色を呈する15や6、3各層の層準では堆積後に乾燥化していたと推定される。

さて、2B区下層の縄文後期および晩期層の花粉化石群の調査を行ったが、縄文後期の植生を復元するための十分な資料は得られなかった。縄文晩期の3層からも十分な資料が得られていないが、2層と4層の花粉化石群が類似し、さらに3層の産出傾向も似ることから、2層の花粉化石群を縄文晩期の組成とみなして問題ないであろう。

縄文晩期頃の周辺の植生は、低地にはハンノキ湿地林が形成され、自然堤防や周辺の台地及び丘陵には、コナラ亜属を主としクリ属やニレ属-ケヤキ属、カエデ属、ウコギ科などの植物相からなる落葉広葉樹林が分布していたとみられる。本遺跡の西方約1kmに位置する富沢遺跡でも2500～5000年前にコナラ亜属が優占する(仙台市史編さん委員会、1994)ことから、この付近の台地および丘陵には縄文時代後・晩期にはナラ類を中心とする落葉広葉樹林が広がっていたと推定される。一方、クリ属は虫媒花で広域に散布しにくいが、2層では11～19%と比較的多く占めることから、周辺の自然堤防などの微高地にクリ林が形成されていた可能性はある。また、3層におびただしい微粒炭を含むことや、遺物を包含することからも集落等に隣接してクリ林を形成していた可能性は高い。但し、誘導化石が含まれることからも明らかのように、クリ花粉が上流域から搬入された異地性花粉でないと断言できないため、周辺の古植生を復元するには時間、空間的な検討が必要である。クリ林は縄文前期末以降に青森県三内丸山遺跡(吉川・辻、1998)や関東平野(吉川、1999a)など各地で優勢で人為によりもたらされたと推定されている。奥松島の里浜貝塚でも縄文後期にはクリ林が形成されていた(吉川、1999b)ことから、自然堤防などの微高地にクリ林をつくり植物食を確保していた可能性は十分にある。

以上のように、14～2各層は概ね同様な環境で形成され、15、6、3各層の形成期には乾燥化していたとみられる。縄文晩期頃には、低地にはハンノキ湿地林が、周辺の自然堤防や台地及び丘陵にはナラ類を中心とする落葉広葉樹林が形成されていた。また、自然堤防などの微高地にクリ林が形成されていた可能性はあるが、時間、空間的な検討が必要である。

引用文献

- 仙台市史編さん委員会. 1994. 仙台市史 特別編Ⅰ 自然. 520 p., 仙台市.
- 吉川昌伸・辻誠一郎. 1998. 三内丸山遺跡第6鉄塔スタンダード・コラムの花粉化石群. 「三内丸山遺跡Ⅳ-第6鉄塔地区調査報告書2-(第2分冊)」(青森県教育庁文化課編), 11-14.
- 吉川昌伸. 1999a. 関東平野における過去12,000年間の環境変遷. 国立歴史民族博物館研究報告, 第81集, 267-287.
- 吉川昌伸. 1999b. 里浜貝塚西畑地点の縄文時代後期以降の花粉化石群. 「鳴瀬町文化財調査報告書第5集 里浜貝塚 平成10年度発掘調査概報」(鳴瀬町教委員会編), 82-90. 奥松島縄文村歴史資料館

表1 長町駅東遺跡2B区下層の堆積物の性質および固相構成

層位	堆積物の特徴	含水比	堆積物の性質(重量%)			堆積物の固相構成(体積%)		
			砂	泥	強熱減量 (有機物量)	砂	泥	有機物
2a	灰オリーブ色シルト	45.1	52	85.0	9.8	4.4	76.2	19.4
2b	灰オリーブ色繊維～細繊維砂質シルト	28.6	40.8	51.5	7.7	35.7	48.3	16.0
2c	黒褐色シルトと灰オリーブ色シルトが混じる	43.3	1.2	87.5	11.3	1.0	77.0	22.0
3a	オリーブ黑色粘土質シルト	43.9	1.6	85.8	12.6	1.3	74.5	24.2
3b	オリーブ黑色粘土質シルト(縄文時代後期)	40.3	1.2	86.2	12.6	1.0	74.8	24.2
3c	オリーブ黑色粘土質シルト	48.2	2.3	85.2	12.5	1.9	74.1	24.0
4	オリーブ灰色粘土質シルト	43.8	2.4	87.1	10.5	2.0	77.4	20.6
6	オリーブ黑色粘土質シルト(縄文時代後期)	53.8	1.6	84.6	13.8	1.2	72.6	26.1
7	オリーブ黑色粘土質シルト(縄文時代後期)	52.6	6.5	81.7	11.8	5.3	71.8	22.9
8	オリーブ黑色粘土質シルト(縄文時代後期)	50.0	5.8	82.8	11.4	4.8	73.0	22.2
14	灰オリーブ色粘土質シルト	46.8	8.0	82.1	9.9	6.7	73.7	19.6
15	オリーブ黑色中～細粒砂質シルト	35.8	32.9	57.8	9.3	28.2	53.0	18.8

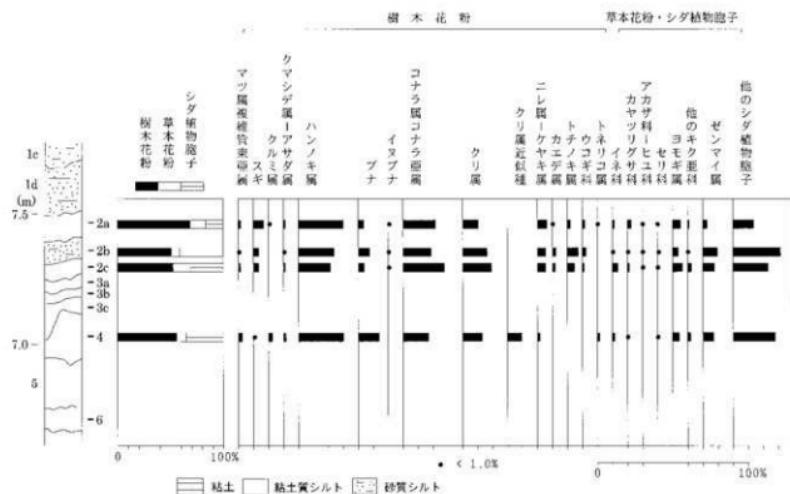
表2 長町駅東遺跡2B区下層より産出した花粉化石の組成表

和名	学名	2a	2b	2c	3a	3b	3c	4	6	7	8	14	15
樹木													
モミ属	<i>Abies</i>		2					1					
ツガ属	<i>Tsuga</i>		1	2	1				1				
トウヒ属	<i>Picea</i>		2	2	3			1					
マツ属單球管束亞属	<i>Pinus subgen. Haplospina</i>		3	1									
マツ属複球管束亞属	<i>Pinus subgen. Diplostrobus</i>		4	1	2		1		3				
マツ属(不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>		2										
コウナシマキ属	<i>Sciadopitys</i>		3	2	1			2					
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.f.)D.Don	15	6	5				1	1				
イチイ科-ヒノキ科-イヌガヤ科	<i>Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae</i>	1											
ヤナギ属	<i>Salix</i>		2										
クルミ属	<i>Juglans</i>		2					3				2	
クランベ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	3	1	2		2	2	1					
ハシノキ属	<i>Corylus</i>							1					
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	1	1	2	4			2				
ハンノキ属	<i>Aleurites</i>	66	38	31	9	16	8	35	11	4	9	2	
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	8	12	6	2	3	4	16	1	1	2	1	
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	2	1	1									
コナラ属コナラ属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	48	30	40	11	17	14	20	2	3	1		
コナラ属アカガシ属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	1	1	1									
クリ属	<i>Castanea</i>	23	26	28	3	13	7	15		2	1		
クリ属近似種	cl. <i>Castanea</i>					2		11	3	3	1	1	2
シイノキ属	<i>Gastonea</i>	1											
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	14	9	8		2		2					
ウルム属	<i>Rhus</i>			1		1							
モチノキ属	<i>Ilex</i>	1	5		1	1	1	1					
カエデ属	<i>Acer</i>	1	4	3	1	2	2				1		
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	5	12	7		3	2						
ブドウ属	<i>Vitis</i>	1											
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	2											
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	4	4	2		1							
ミズナ属	<i>Coriaria</i>			1									
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>			1			1						
トヨタコ属	<i>Fusinus</i>	1				1		2		1			
ニワトコ属	<i>Sambucus</i>			1									
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>							1					
草本													
イネ科	<i>Gramineae</i>	5	2	11	1	5	1	3				1	
カヤリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	8	2	4		2		1					
ギボシソウ属	<i>Houttuynia</i>	1											
クワ科	<i>Moraceae</i>			1									
タデ科サエナテ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum sect. Persicaria - Echinocaulon</i>	1	2									1	
アカネ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	1	1	1									
カラツシソウ属	<i>Thalictrum</i>	2		1		1						1	
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	3	1				1						
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	1	3	1		3	2	1					
ヘクタカズラ属	<i>Pueraria</i>	3											
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	17	12	18	26	31	7	9	8	2	1		1
他のキク亜科	<i>Tubuliflorae</i>	4	1	7	3	7		4	1	2			
タンポポ科	<i>Liguliflorae</i>			1	1								
シダ植物													
ヒカリカズラ属	<i>Lycopodium</i>			1		1		2					
ゼンマイ属	<i>Osmunda</i>	9	30	21	2	17	5	15	1	2	1	1	1
単条型孢子	Monolete spores	36	72	41	13	33	9	51	5	19	20	12	5
三葉型孢子	Trilete spores	8	26	23	1	9	3	5	2	2	2		
コケ類													
ミズベ科	<i>Sphagnum</i>	2			1						1		
樹木花粉總数	Total arboreal pollen	219	159	144	31	70	40	115	9	23	7	15	5
草本花粉總数	Total nonarboreal pollen	46	21	45	31	49	11	18	9	4	1	3	1
シダ植物孢子総数	Total fern spores	33	128	86	16	80	17	71	10	23	23	14	6
花粉-孢子総数	Total pollen and spores	318	311	275	78	199	68	204	28	50	31	32	12
不明花粉	Unknown pollen	6	13	16	3	13	1	14	3	1	2	1	1

表3 2B区下層における樹木花粉量及び微粒炭量

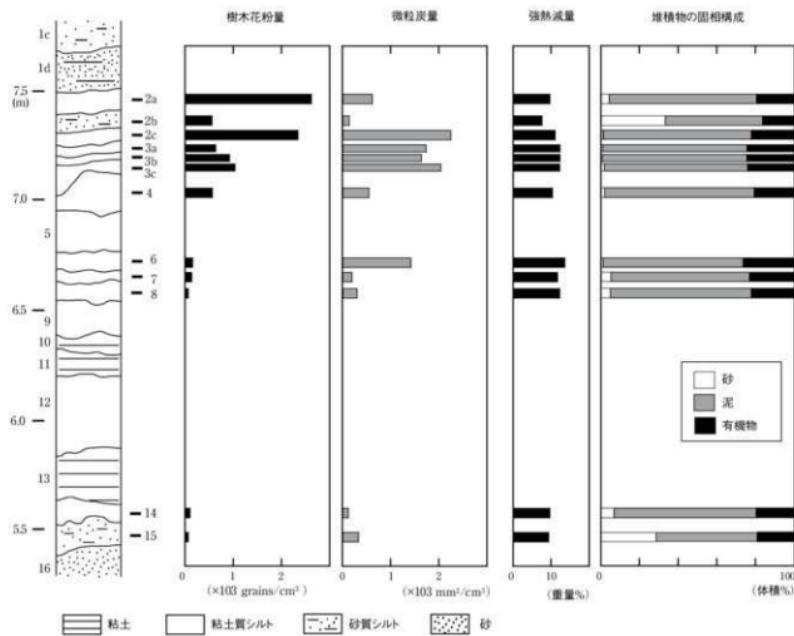
層位	樹木花粉量 (grains/cm ³)	微粒炭量 (mm ³ /cm ³)	微粒炭量 比率(%)
2a	2636	614	99
2b	575	161	90
2c	2338	2362	99
3a	628	1756	99
3b	911	1667	100
3c	1037	2078	100
4	574	580	99
6	166	1434	100
7	126	208	99
8	70	302	100
14	100	126	100
15	53	330	100

注) 微粒炭量比率は植物遺体に占める微粒炭の割合を示す。

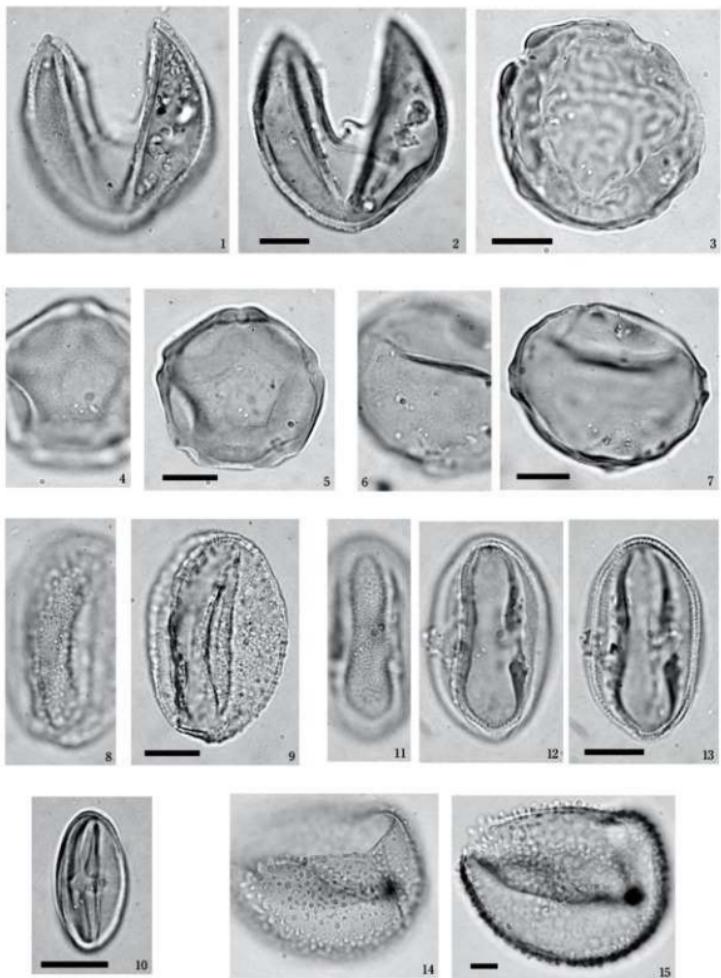


第342図 (図1) 長町駅東道路2B区下層の主要花粉分布図

(出現率は、樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した)



第343図 (図2)長町駅東遺跡2B区下層における樹木花粉量、微粒炭量及び堆積物の特性



1-2:スギ(*Cryptomeria japonica*), 2a, AFR.MY 1451. 3:ケヤキ属(*Zelkova*), 4, AFR.MY 1449.
 4-5:ハンノキ属(*Aleurites*), 2b, AFR.MY 1446. 6-7:クマシテ属、アサダ属(*Carpinus - Ostrya*).
 2a, AFR.MY 1450. 8-9:コナラ亜属(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*), 4, AFR.MY 1448.
 10:クリ属(*Castanea*), 2a, AFR.MY 1444. 11-13:トネキ属(*Aesculus*), 2b, AFR.MY 1445.
 14-15:ゼンマイ属(*Osmunda*), 2b, AFR.MY 1447.

(スケールは10μm)

第344図 (図版1)長町駅東遺跡2B区より産出した花粉化石

第8章　まとめ

あとと長町土地区画整理事業に伴う発掘調査は、平成10年から開始され、これまで西台畠遺跡(平成10年～13年・17年)、郡山遺跡(平成13年・16～18年)、長町駅東遺跡(平成13年～18年度)の調査が行なわれている。

西台畠遺跡の調査では、総数140軒の竪穴住居跡のうちに、その配置や構造に一定の規格を持つブロックが確認されている他、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙外郭大溝の更に外側に配置された外溝跡の西辺などが確認されている。

郡山遺跡の調査では、平成13年度の調査において、Ⅰ期官衙に関連すると考えられるL字形に延びる溝跡が確認されている。この溝跡はⅠ期官衙西辺の推定ラインから西50mに位置し、南北方向に延びる部分では、平行している。Ⅰ期官衙に関連する施設か、官衙周辺の区画のための溝と考えられる。さらに平成16年度の調査では外溝跡の北西コーナーが確認され、同年の国庫補助事業による郡山遺跡第166次調査で発見された東辺とともに、これまで南辺と西辺で発見されていた外溝が官衙の全城を囲んでいることが明らかになった。これにより官衙は材木列とその外周をめぐる大溝により区画され、さらにその外側にも外溝をめぐらせた区画構造を持つことが明らかになってしまった。

長町駅東遺跡の調査では、総数約270軒の竪穴住居跡が調査され、平成19年度に報告を行なった長町遺跡第4次調査の報告では、集落の区画施設と考えられる区画溝跡と通路状遺構、材木列などが報告されている。今回の1区・2A区・2B区及び3A区の報告では、官衙の機能した時期の区画施設はないが、官衙造営以前に集落の一部を区画していたと考えられる溝の存在が、確認されている。

今回の報告後、最終報告となる3B区の報告時に遺構・遺物の総体をつぶさに踏査し、長町駅東遺跡の調査の全容を明らかにしていきたいと考えている。

1. 調査成果の基礎整理

a. 遺構確認面

4区における遺構の確認状況と同様、当該地区は地表面付近が近世以降に大きく擾乱されており、各遺構は上部が失われている状態にあった。このため、確認面をⅣ層の上面に設定し、遺構の検出を行なったが、これらが掘り込まれた層位については、明確にはできなかった。ここでは、調査区壁面で把握された土層断面を基にして、検出された遺構全体の傾向を検討したい。

Ⅰ層は近代以降における客土と考えられ、3A区北部の並行して走る溝状の擾乱中に落ち込むⅡ層についても、近世またはそれ以降の耕作土にあたるものと推定される。

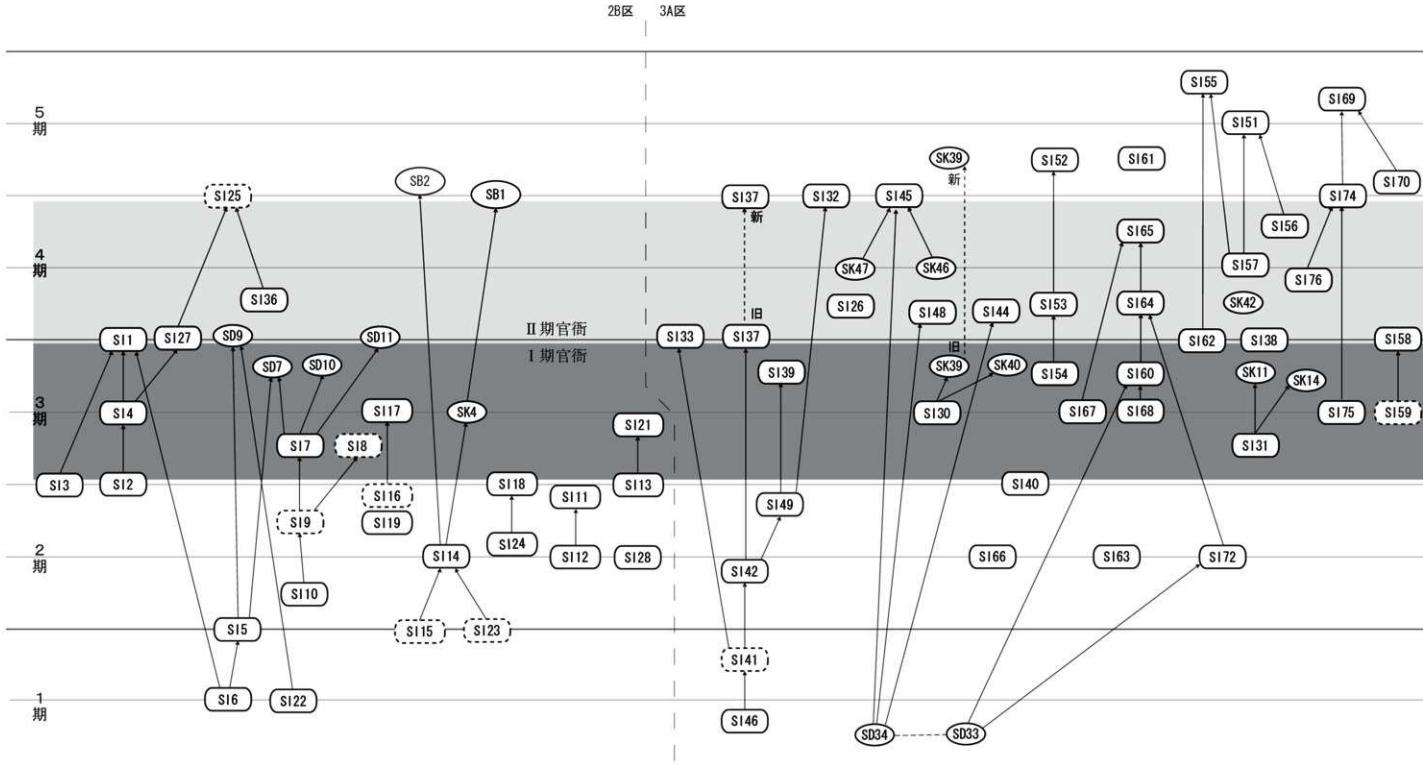
検出された遺構中で、最も上位の位置から掘り込まれていると推定されるのは、一部のピット群であり、平面的な分布の上でも、竪穴住居跡をはじめとする他の遺構の埋土を切っている。個々の性格は不明だが、少なくともⅢ層上面から掘り込まれているものが認められる。同じく、Ⅲ層上面から掘り込まれている遺構としては、2B区の溝跡SD8・SD9が挙げられる。3A区のSK20は、Ⅲ層からの掘り込みである。

竪穴住居跡は、Ⅳ層上面での確認となった。堆積土をⅢ層下面で削平されているもの(SI25・SI27・SI53・SI63)と、堆積土にⅢ層がわずかに落ち込むもの(SI4・SI31・SI32・SI52)に2分される。ただし、遺構の性質上、人為的な埋め戻しなどを考慮すれば、必ずしも時期間に結びつくものではない。

竪穴住居跡の床面下から検出された溝跡SD33・SD34は、Ⅳ層中に掘り込まれているものと考えられる。

b. 遺構重複状況

竪穴住居跡の重複関係だけでも、最大で5段階にわたる遺構の変遷を把握することが出来た。本章2節にて詳細



第345図 遺構重複関係図

を述べるが、出土遺物との関連から各遺構の時期幅と切りあい関係をまとめたものが、第345図である。

これを基にして、長町駅東遺跡の集落変遷に以下の5時期を設定した。

長町駅東遺跡1期

6世紀後半～7世紀前半に位置づけられる5軒の竪穴住居跡と溝跡SD33・SD34が確認できた。竪穴住居跡はいずれも一辺が6～7mの大型のものである。

長町駅東遺跡2期

7世紀前半～中葉に位置付けられ、出土遺物から帰属時期を特定できた竪穴住居跡は、2B区で7軒、3A区が3軒であった。重複関係から、この時期に帰属すると考えられる遺構も2B区に集中している。竪穴の規模は一辺が5mを下回る中型～小型のものが中心となる。

長町駅東遺跡3期

7世紀後半、郡山遺跡Ⅰ期官衙の時期に相当する。時期を特定できた竪穴住居跡だけでも19軒、SD7・SD10などの溝跡、SK39をはじめとする土坑なども存在し、一つの中心的な時期となる。竪穴の規模は中型のものが中心となり、一辺が6mを超す例は確認されていない。遺構分布の中心は3A区に移る。

長町駅東遺跡4期

7世紀末～8世紀代前半、郡山遺跡Ⅱ期官衙の時期に相当する。時期を特定できた18軒の竪穴住居跡の他、SB1など、一部の掘立柱建物跡もこの時期に帰属する。直前の3期と共に、当遺跡の中心的な時期となっている。遺構は3A区を中心に分布しており、竪穴の規模もⅢ期同様中型のものが主体となる。

長町駅東遺跡5期

8世紀後半、郡山遺跡における官衙の終焉期以後、長町駅東遺跡の集落も急激に縮小しており、3A区の一部に7軒の住居跡が確認できるのみである。

c. 竪穴住居跡の整理

2B区・3A区において確認された竪穴住居跡77軒について、住居構造に関する要素を整理し、一覧表とした。各項目の記載方法については、第4次調査報告書（仙台市教育委員会 2007）を踏襲するものとするが、今回、「方向」については、6章にて述べた主軸方位を記載した。

以下、各項目毎に認められた傾向について概観したい。

〔規模・形態〕

前段の時期区分に従って住居規模の変遷を見ると、特に竪穴の規模に関して2つの画期を見出すことが出来る。まず、一辺が6mを超える竪穴が中心となる1期から3m～5m前後の竪穴が中心となる2期、次いで、官衙の造営の以前、以後にあたる2期から3期以後にかけてである。3期以後の竪穴住居跡は、一辺がほぼ4m～6mの範囲に収まり、分布域も調査区内北側に移動し、3A区が中心となる。

平面形状については、短辺：長辺の比率が1:1.15を超える例を「長方形」として表中に記載したが、この長方形の住居は、2期～4期にかけて散見され、SI47など、その他の多くの竪穴住居とは異なる上屋構造が想定できるも

のも存在する。

〔方向〕

今回の調査区における住居の主軸方位は、真北方向を基準として、東西 180° の範囲に収まっており、例外はカマドがわずかに南東を向くSI65のみであった。また、検出された半数近くの竪穴住居跡がN- $17^{\circ} \sim 45^{\circ}$ -Wに主軸方位をとっている。この方位を向く竪穴住居跡は、集落の全ての段階を通して、ある程度の割合で認められ、何らかの地形的、気候的な制約をうけているものとも考えられる。

これら、集落の主体となる北西方向を軸とする住居跡に対し、北東方向、N- $18^{\circ} \sim 35^{\circ}$ -Wを向く住居跡が、3期から4期初頭にかけて特徴的に存在している。時期的な特性から、郡山遺跡Ⅰ期官衙の軸方位であるN- 30° -Eを意識していたものと推定できようか。

真北に対して、軸の傾きが 5° 以下となる住居跡は、郡山遺跡Ⅱ期官衙の時期となる4期に増加する傾向にあり、3期以降ではN- 90° -E、すなわちカマドが真東を向く住居跡も出現する。

各時期を通して住居跡の軸方位は、上述の通り一定の規則性を有するものの、同時に複数の種類が混在する形となる。

〔カマド〕

住居の方向としても述べた通り、カマドは多くの場合住居の北壁または北西の壁に設けられていた。住居内の位置関係を想定した場合、住居の中心軸上に位置するものと、相対的に中心軸の左側に寄るもの（カマドが北壁にある場合、東壁寄り）に大別できる。左側に寄る例は、カマドが東側を向く住居跡が多く、4期以降わずかに増加する。

構造については、例外（SI75）を除き、検出された全ての住居跡で、竪穴内部にカマド本体を構築し、壁外へ煙道が伸びる形となるものであった。袖部の平面形状は、壁に直行するもの、内湾するもの、外反するものの3種に大別可能であり、特に袖が内湾する形状を有するカマドは、4期以降に増加する傾向を指摘できる。

煙道は全体に1m以上となる場合が多く、2期の後半ないし3期以降は先端部に煙出しのピットを有するものも見られる。

住居の構造と同様に、一つの時期に複数種のカマドの構造が共存していた可能性が高く、各要素間および出土遺物、住居構造との相関関係の精査が今後の課題となる。

2. 各期の遺構出土土器について

ここでは、当遺跡と時期の重なる仙台市周辺の主な遺跡出土の土器群と比較しつつ、長町駅東遺跡出土土器（1～3A区）の編年的位置について想定を述べ、各期の土器を概観する。

なお、本遺跡出土土器の器種分類、機能分類を含む精緻な編年観および本遺跡の性格については、長町駅東遺跡の検出遺構・出土土器の資料がすべて出揃う3B区の報告時に提起したい。

本遺跡の検出遺構は、切り合と出土土器を基準に各期を1期から5期に区分した。特に本遺跡と対比できる遺跡として参照した郡山遺跡・栗遺跡の各出土土器は、郡山遺跡が栗開式期～国分寺下層式期前半までの時期幅を持ち、栗遺跡が住社式期後半～栗開式期、一方、長町駅東遺跡出土土器（1～3A区）は、住社式期後半～国分寺下層式期中頃～後半までの時期幅を持つと考えられる。本遺跡各期の実年代の中心及び本遺跡出土土器と対比した郡山遺跡・栗遺跡の出土土器などの編年観の基礎となっている住社式期、栗開式期、国分寺下層式期との比定時期は、長町駅東遺跡（1～3A区）の1期が6世紀後半～7世紀前半、同2期が7世紀前半～中葉；栗開式期前半・郡山遺跡ブレ1期に相当、同3期が7世紀後半～8世紀前半；郡山II期官衙I期に相当、同4期が8世紀前半～中葉；国分寺下層式期前半～中葉；郡山II期官衙終焉以後の国分寺下層式期中頃～後半に相当すると考えられる。

管穴柱頭一覧表

柱頭番号	調査区	方 壁	腹模	平底形	カマド 筋古	カマド 筋新	燃焼部 内側	燃焼部 外側	抽落状況	燃焼部 底面	燃焼部 先端	燃焼部 途中	時期
S11	2B	N 45° E	中型	方形	-	-	中央	内側	外反	下	○	-	7c8e 4期
S12	-	N 45° E	小型	方形	-	-	中央	内側	-	-	-	-	7c 2-3 3期
S13	-	N 38° W	小型	-	-	-	中央	内側	外反	-	-	-	7c 2-3 3期
S14	-	N 26° W	大型	方形	-	-	中央	内側	-	-	-	-	7c 3-4 3期
S15	-	N 18° E	大型	方形	-	-	中央	内側	外反	-	-	-	6c 3-4 1期
S16	-	N 18° W	大型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c 1-2 1期
S17	-	N 36° W	大型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c 3-4 3期
S18	-	N 36° W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c 2-3 3期
S19	-	N 40° W	大型	方形	-	-	-	-	-	-	-	-	7c 2 2期
S20	-	N 40° W	大型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c 1-2 2期
S21	-	N 30° E	小型	方形	新	-	-	-	-	水平	○	-	7c 2-3 3期
S22	-	N 45° W	中型	方形	新	-	-	-	-	-	-	-	-
S23	-	N 45° W	中型	方形	新	-	-	-	-	-	-	-	-
S24	-	N 45° W	中型	方形	新	-	-	-	-	-	-	-	-
S25	-	N 26° W	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S26	-	N 9° W	中型	-	-	-	中央	内側	内湾	-	-	-	8c 2-3 5期
S27	-	N 9° W	小型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c8e 4期
S28	-	N 20° E	大型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c8e 4期
S29	-	N 12° W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S30	-	N 26° W	大型	方形	-	-	-	-	-	-	-	-	6c 3-4 1期
S31	-	N 18° E	大型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S32	-	N 90° E	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c 3-4 3期
S33	-	N 0° W	大型	-	-	-	中央	内側	外反	下	○	-	7c 3-4 3期
S34	-	N 18° E	大型	方形	新	-	-	-	-	下	-	-	7c8e 4期
S35	-	N 32° W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S36	-	N 45° E	小型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S37	-	N 18° E	大型	方形	-	-	中央	内側	直行	水平	○	○	7c8e 4期
S38	-	N 39° W	小型	方形	北 2.0°	内側	外反	-	-	水平	-	-	7c8e 4期
S39	-	N 42° E	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c8e 4期
S40	-	N 44° W	中型	長方形	-	-	中央	内側	直行	水平	-	-	7c 2-3 2期
S41	-	N 32° E	大型	長方形	-	-	中央	内側	直行	下	○	-	7c 2-3 2期
S42	-	N 30° W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6c 4 1期
S43	-	N 2° W	小型	方形	-	-	中央	内側	内湾	下	-	-	7c8e 4期
S44	-	N 0° -	中型	方形	新	中央	内側	外反	-	下	-	-	7c 3-4 3期
S45	-	N 11° W	大型	方形	新	中央	内側	内湾	下	○	-	-	8c 2-3 5期
S46	-	-	-	日	東 2.0°	-	-	-	-	下	○	-	-
S47	-	N 42° W	大型	方形	-	-	中央	内側	外反	水平	-	-	6c 3-4 1期
S48	-	N 40° E	中型	長方形	-	-	-	-	-	下	○	-	8c 1 4期
S49	-	N 20° W	中型	方形	-	-	東偏	内側	内湾	-	-	-	8c 1-2 4期
S50	-	N 35° E	大型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c 3-4 3期
S51	-	N 40° E	小型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7c 2 2期
S52	-	N 7° W	大型	方形	-	-	中央	内側	外反	下	-	-	8c 3-4 5期
S53	-	N 77° E	大型	-	-	-	南より	内側	内湾	上	○	-	8c 1-2 4期
S54	-	N 25° W	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8c 1-2 4期
S55	-	N 90° E	中型	方形	-	-	南より	内側	内湾	下	○	-	8c 4 5期
S56	-	N 46° W	中型	方形	-	-	中央	内側	外反	水平	-	-	8c 2 4期
S57	-	N 32° W	中型	方形	-	-	中央	内側	-	-	-	-	8c 1-2 4期
S58	-	N 62° W	中型	方形	-	-	中央	内側	直行	下	○	-	7c8e 4期
S59	-	N 17° W	小型	-	-	-	中央	内側	直行	水平	-	-	8c 1-2 4期
S60	-	N 30° W	中型	方形	-	-	中央	内側	直行	水平	-	-	7c 4 2期
S61	-	N 8° W	大型	-	-	-	中央	内側	直行	下	-	-	8c 2-3 5期
S62	-	N 35° W	中型	長方形	-	-	重 2.0°	内側	内湾	水平	-	-	7c8e 4期
S63	-	N 28° W	大型	方形	-	-	南より	内側	直行	水平	○	-	7c 4 3期
S64	-	N 18° W	大型	方形	-	-	東より	内側	直行	-	-	-	7c8e 4期
S65	-	N 100° E	小型	方形	-	-	中央	内側	内湾	下	-	-	8c 2 4期
S66	-	N 19° W	小型	方形	-	-	-	-	-	-	-	-	7c 1-2 2期
S67	-	N 64° E	小型	方形	-	-	中央	内側	直行	水平	-	-	8c 2-3 5期
S68	-	N 41° W	中型	-	-	-	中央	内側	直行	水平	○	-	7c 3-4 3期
S69	-	N 4° W	中型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S70	-	N 29° W	小型	-	-	-	中央	-	-	-	-	-	8c 4 5期
S71	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S72	-	N 48° W	-	-	-	-	中央	内側	直行	下	○	-	7c 1-2 2期
S73	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S74	-	N 5° W	小型	方形	-	-	-	-	-	-	-	-	8c 2-3 5期
S75	-	N 18° W	小型	-	-	-	中央	外側	-	-	-	-	7c 3-4 3期
S76	-	N 27° W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S77	-	N 60° W	中型	方形	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第345図および第346図～第355図は1～3A区の堅穴住居を中心とする遺構切り合い関係図と出土土器の各期別の土器群の掲載図である。以下に各期の出土遺物を器種別に述べ、併せて時期設定の概要を記す。

(1) 長町駅東遺跡1期

新旧関係と出土土器から1期に属すると考えられる遺構は、SI5・6・22・46・SD33・SD34である。本期の遺構群から出土した土師器の坏は、6点を掲載した。SI6の1、SI5の1・2、SI46の1などは法量や器形から陶邑の2型式の須恵器を写した鬼高系土師器の坏で、広義には関東系土師器と呼称されているものである。SI6の1・SI5の2は須恵器坏身、SI5の1・SI46の1は丸底から緩やかに内湾しつつ直立気味の口唇部にいたる器形で、口縁部が短い須恵器坏蓋を写したものと考えられる。これらの土師器の坏は千葉県房総地域では6世紀後半で盛行する。SI46出土の坏2は、丸底の底部から逆「ハ」の字状に強く外傾する比較的長い口縁部を持つ。住社式期の後半に集中して多く見られる器形である。SI22出土の塊1は、底部外面ハケメ調整が施され、器形も見込みが深く丸底の底部から内湾しつつ立ち上がり、直立気味の口唇部に至る。南小泉式期から残る器形の系譜である。高坏は、SI5の4が長脚で外面赤彩、坏部内面黑色処理、SD33の1は、壺部に段を有する。いずれも7世紀代以前の特徴を持つ。SI22の2・3などの小型の壺も南小泉式以降残る古墳中期の器形の系譜である。3は、特に丁寧なヘラミガキ調整が施され、いわゆる壺の系譜に連なる。壺はSI6の球胴でやや頭部の直立する3なども古墳後期初頭によく見られる器形であろう。SI22の4、SD33の2なども球胴の形状を呈する。SD33の4は、壺としたが、瓶の可能性もある。長胴で直立気味の胴部上半から逆「ハ」の字状に外傾する長い口縁部を持つ。SI46の5・SD33の3も長胴の壺である。SI5の3は、口縁部が短く外反する鉢状の壺である。瓶は、SI46の7のように砲弾形で単孔のものが、見られる。1期は以上の土器組成で構成される。鬼高系土師器の坏が盛行し、在地の丸底の土師器坏と共に伴すること、壺は、長胴・球胴・鉢状の3種が競合することなどが本期の特徴であろう。

(2) 長町駅東遺跡2期

新旧関係と出土土器から2期に属すると考えられる遺構は、SI2・10・12・13・18・19・28・40・66・72である。本期の土師器坏は、10点を掲載した。SI12の1・4は、関東系土師器と呼称されるものである。小型で丸底から内湾しつつ立ち上がり、両者とも短い口縁を有し、1は、わずかに内傾する口唇部に、4は、直立気味の口唇部にいたる。千葉県房総地域では、7世紀前半から中頃にかけて盛行する器形である。SI19の1も関東系土師器で、郡山遺跡のプレI期の住居(SI260の3)から出土したものに類似する。SI2の2、SI18の1は、底部と体部の境目で段を有し、口縁部が逆「ハ」の字状に外傾する器形である。前代の同器形のものにくらべると口縁部が短い。これらと同種の土師器は、栗遺跡などで多く出土している。SI12の2は、1に比べ新しく、7世紀中頃に出現する器形であり、丸底の底部から外傾し口唇部にいたる。SI18の2、SI40の1は、丸底の底部からゆるやかに内湾し口唇部にいたる。SI18の2は、平底状の底部から内湾し、直立気味の口唇部にいたる。以上の3点は、いずれも関東系土師器と呼称されているものである。SI10の1、SI12の3、SI2の1は、塊である。SI10の1・SI12の3は、やや大降りの塊で古墳中期以降残る器種である。SI2の1は、小型の塊で、須恵器の坏蓋を写したものか、須恵器の法量が最小になるこの期になって出現する器形であろう。SI18の3の高坏は、前代のものに比べ、短脚となる。壺は、SI12の6・7の長胴壺、SI13の1・SI72の2・4・5の胴部中央の張った壺などが、栗遺跡のII期～IIIa期に比定されるものである。SI2の4・SI18の4・SI72の6などの小型の壺、SI40の3の粗製の鉢、瓶は、SI66の2の鉢形單孔のもの・SI66の3の多孔のもの・SI40の4の単孔でゆるやかに外傾する胴部からやや開き気味に口唇部にいたるものなどが出土している。また天井部外面に3条の沈線を施す須恵器の蓋としたSI28の1なども本期に属するものである。2期は以上の土器組成で構成される。器種も器形も前代にくらべ、格段に豊富になること、坏・壺・壺、

瓶など器種別に法量分化がすすむことが本期の特徴といえる。

(3) 長町駅東遺跡3期(郡山遺跡Ⅰ期官街)

新旧関係と出土土器から3期に属すると考えられる遺構は、SI4・7・14・17・30・31・39・49・60・63・68・75である。本期から構築された竪穴住居の数は倍増し、それに比例して出土土器の数も急激に増えてくる。

本期の土師器の壺・塊類は、36点を掲載した。SI4の1、SI14の3、SI31の1、SI49の4、SI75の1、SI63の2などは、丸底の底部から緩やかに内湾し口唇部にいたる器形である。比較的に見込みが浅く皿状を呈するものもある。法量分化がすすみ大・中・小に細分類できる器形である。栗田式期の後半に多く見られる。SI7の1、SI14の1、SI17の2、SI49の1、SI63の3、SI68の1は、底部と体部の境目で段を有し、口縁部が逆「ハ」の字状に外傾する器形である。前期から引き継ぎ残る器形であり、本期で最も多くなる。体部中央と体部下端に段を持つもの、口唇部に向かってゆるく外傾するもの、きつく外傾するものなど同種器形のなかで多様化し、大・中・小があり法量分化も進んでおり、さらなる細分に耐える。なお、SI49の3などは本期より二段階古い器形であり、1期に属する。SI17の1、SI49の2は、丸底の底部から直立する口唇部にいたる。関東系土師器と呼称されているもので、本期以前に盛行する器形である。SI30の1は体部下端に段を有する皿状の器形であり、口縁部は、直立からわずかに内湾しつつ口唇部にいたる。本期から出現する器形である。SI14の2、SI63の1は丸底状の底部から外反する口縁部を有す。この器形も本期から出現する。SI39の1は小型の壺で前期から引き継ぎ残る器形である。SI49の5・6は、鉢形の壺で引田式以降残る器形である。SI31の2の高壺は、壺部に段を有し脚は短かく太い。前期から引き継ぎ残る器形である。壺は18点出土している。SI4の3・4、SI14の7、SI75の3・5は長胴壺である。SI4の4は、突き出した台状の底部を有し、非常に長い胴から直立気味の口縁部を経て、わずかに外反する口唇部にいたる。SI75の5は、胴部下半が彫れるタイプである。いずれも栗遺跡の大型壺II類に分類されたものである。SI14の壺5・6、SI75の2・4は、小型の壺である。これらは、栗遺跡のⅡ期～Ⅲ期に比定されるもので、栗田式期の中頃～後半のものである。SI30の3、SI31の4・5、SI63の5、SI68の2は球胴形の壺である。SI31の3は、鉢形の壺である。SI63の4は小型の壺、6は多孔の瓶の底部である。また、本期から須恵器も一定量出土する。須恵器壺はSI17の3、SI30の2、SI39の2である。SI17の3は法量の小さい环身で7世紀中頃のものである。SI30の2は、丸底状の壺でわずかに外傾して口唇部にいたる。SI39の2は、大降りの高台付壺である。いずれも7世紀後半代のものである。またSI17の4は蓋としたが、壺の可能性もある。SI60の1は壺の肩部であろう。SI63の7は壺である。

3期は、以上の土器組成で構成される。本期の特徴は、前期よりさらに同一器種の法量分化が進むこと、須恵器が一定量出土することである。

(4) 長町駅東遺跡4期(郡山遺跡Ⅱ期官街)

新旧関係と出土土器から4期に属すると考えられる遺構は、SI1・26・27・32・33・37・38・43・44・45・47・48・53・56・57・58・62・64・65・74である。本期が当該遺跡の最盛期のように、全期を比較して検出された竪穴住居数も最多となる。本期の土師器の壺・塊類は82点を数える。

本期の土師器の壺の器形に見られる最も特徴的なことは、平底状の器形が多くなり、器形の多様化、法量分化がすすんでいることである。平底状の器形は、皿形(盤形)、箱形、見込みの深い塊形などに大別可能である。平底で皿形(盤形)の器形には、SI1の1、SI27の1、SI33の1、SI53の1、SI62の5、SI64の8・10・11、SI74の1・3などがある。これらと同器形である土師器ではなくロクロ土師器の壺であるSI32の4の底部切り離し技法は、回転糸切り後未調整であり、本期以降の特徴を示しており、後代の混入と考えられる。SI27の1、SI53の1、

SI62の5などは、口唇部が内湾もしくは直立する器形である。平底で箱形の器形にはSI33の2、SI62の1などがあり、盤形と箱形の中間の器形は、SI47の2、SI74の1などである。平底で見込みの深い塊形の器形は、SI33の4・5、SI44の10・12、SI45の1、SI48の5、SI64の14、SI65の1である。SI33の7、SI45の1、SI64の15などのように非常に大降りなものもある。いずれも黒色処理後、丁寧なヘラミガキ調整が施されているものがほとんどである。つぎにSI26の6、SI37の2、SI38の1、SI44の4・9・13、SI48の1、SI57の3は、前期で盛行し、本期に残る器形である。丸底の底部から緩やかに内湾し口唇部にいたる器形である。比較的に見込みが浅く皿状を呈するものもある。次に体部と底部の境に段を持つ器形も前期から引き続き残る。SI1の2、SI26の2・3・4・5・7、SI33の3、SI37の3、SI43の1、SI44の1・2・3・5・7、SI48の2・3・4、SI57の2、SI62の2・4、SI64の3・6・9などであるが、SI1の2、SI37の1・3、SI48の4、SI57の2、SI62の2・4、SI64の6のように有段部が形骸化したものも観察され、前期から引き続き残るこの器形が退化しつつある表徴であろう。また、この器形には、SI26の4・7、SI37の1、SI43の1、SI44の6・8・11、SI48の2・3のように皿状もしくは盤状の、器高に比べ口径の大きなものも、一定量観察される。土師器の甕は、前期に引き続き長胴の甕と小型の甕、鉢形の甕があるが、球胴形の甕はほとんど見られなくなる。小型の甕は、SI26の9、SI48の6などであり、SI26の9は、縦位のハケメ調整の後、下半部のみ縦位のヘラケズリを施す。鉢形の甕は、SI1の3、SI4の23などである。これらは、器高は低いが口径の大きい口縁部が短く外反するタイプである。SI45の6・7は、比較的胴部が張ったやや古手の器形である。ただし、SI45の7は内外面が丁寧にナデ調整されるなど、本期より古い時期にはない調整が施されている。他に特筆すべきことは、長胴の甕のなかに、SI47の3、SI64の21のように、長い胴部に続く頭部が存在せず、「く」の字状に鋭く屈曲する口縁を有するタイプの甕がはじめて出現することである。SI47の3は、外部調整も前期までのように縦位の調整だけではなく、下半部の縦方向のヘラケズリを横位のヘラナデによりなで消している。鉢は、SI27の3のように平底の底部から外傾し、体部より直立気味の口唇部にいたる器形のもの、SI74の4のように内湾する口縁部を有するものなどが出土している。高坏は、SI43の2のように三方透かしの脚を有し、内面黒色処理後丁寧なヘラミガキを施しているものが出土している。またSI64の24は土師器の蓋である。内外面黒色処理され、非常に丁寧なヘラミガキが施されている。

須恵器は、量も多いが、本期から器種も多様になる。出土器種は、壺、高台付きの壺や壇、盤、蓋、長頸壺、短頸壺、瓶、甕である。須恵器の壺は、前期に出土した丸底状の小型のものであるSI32の2、SI44の21、SI62の10などのほかに平底の壺が多く出土している。SI32の3、SI33の13、SI37の5、SI45の8、SI56の1、SI64の26、SI65の2・3、SI74の5・6などである。SI56の1は、底部手持ちヘラケズリ整形、SI65の3はヘラ切りである。SI45の8、SI65の2は、回転ヘラケズリ整形が施され、切り離し技法は不明である。SI33の14、SI74の7は、平底だが法量が小さく、前期に属するものであろう。SI33の15・16やSI45の9・10、SI64の25などの高台付の壺や壇も前期から出現する器形と考えられる。とくに、SI64の25は、底部突出型の高台付壺と呼称され、静岡県の湖西窯で前期から本期にかけて多く焼成された特徴的な器種である。SI37の6は大型の盤である。SI38の4は、須恵器の擽り鉢である。SI45の12は長頸壺、SI62の12は短頸壺である。SI44の23は瓶である。SI45の11、SI57の8、SI64の28・29・30は、甕である。蓋は、SI44の24・25・26のようにカエリがあるものが残る他に、ボタン状つまみを有するSI48の7、SI47の4、SI62の11などが本期に特徴的な器形で、前期に定量出現するようになるカエリが退化して消失し、口唇部が垂下しようとしているものが共存する。偽宝珠状のつまみを有するSI32の1は大型短頸壺、宝珠状のつまみを有するSI74の8は、脚付長頸壺の蓋であろう。

4期は、以上の土器組成で構成される。本期の特徴は、土師器の壺、須恵器の壺の器形が盤状になり、底部が平底になることで、法量も非常に大きくなる。前期にくらべ、器種も豊富になり、須恵器の出土量も格段に多くなることである。

(5) 長町駅東遺跡5期(郡山遺跡II期官衙終焉以降)

新旧関係と出土土器から5期に属すると考えられる遺構は、SI51、SI52、SI55、SI61である。

土師器は、壺・塊12点、鉢3点、甕4点、壺1点である。土師器壺は、SI51の2、SI55の1が平底の盤状の壺である。SI55の1は、体部下端に回転ヘラケズリ調整が施される。前期から引き継ぎ残る器形である。SI51の1・SI52の2は3期に盛行したもの、SI51の3は4期に盛行する口径の大きい平底へ移行する時期の皿状の器形である。SI61の1は、3期～4期に盛行する体部と底部の境目に段を持つ器形である。SI55の2、SI61の5・7は平底の塊であり、前期に出現した器形である。SI55の3の鉢は、内面黒色処理が施され、内外面ともにいねいなヘラミガキ調整が施される。SI61の3は、台状底部から内湾しつつ直立する口唇部にいたる。SI61の2は、丸底で内外面にいねいにヘラミガキを施す。土師器の甕はSI52の4、SI55の4が、外面叩き整形の甕である。短い口縁部が「く」の字状に外反する。SI52の4は叩き整形のあと横位のハケメ調整が施され、口唇部が受け口状に摘み上げられている。これらの器形と特に口唇部のこの特徴は、8世紀末に比定される伊治城跡出土の陸奥型の甕に見られる特徴である。SI51の4は大型の直口壺である。

須恵器の壺は、10点を掲載した。SI51の8、SI55の5・6・7・8・9・10などは、前期の盤状の壺にくらべ口径がやや小さく、8世紀中頃以降の器形を示す。また、底部調整も10は回転糸切り後外周回転ヘラケズリ整形で8世紀中頃以降多くなる底部整形技法である。その他SI55の11は、大型の鉢で、外面に赤彩が見られる。SI55の12は短頸甕である。これらも8世紀前半代以降に出現する器形である。

5期は、以上の土器組成で構成される。須恵器の壺の器形や法量によって時期的特徴が語られること、端的に言えば、土師器よりも須恵器の量がまさることが、まさに本期の特徴と言える。

1期竪穴住居跡・溝跡
SI22出土遺物



SI46出土遺物



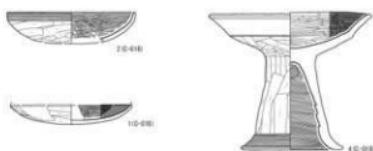
SD33・34出土遺物



SI6出土遺物



SI5出土遺物



第346図 各期竪穴住居跡・溝跡出土遺物(1)

1期竪穴住居跡・溝跡
SI22出土遺物



SI22

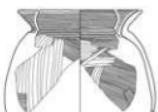
SI46出土遺物



SI46-180



SI46-186



SI46-187



SI46-188

SD33・34出土遺物



SD33-34-381



SD33-34-380

SI6出土遺物



SI6-611

SI5出土遺物

2期竪穴住居跡

SI10出土遺物



SI-423

SI12出土遺物



SI-421



SI-425

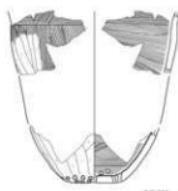


SI-428



A-424

SI166出土遺物



SI-286



SI-287

SI172出土遺物

第347図 各期竪穴住居跡出土遺物(2)

2期竪穴住居跡
S110出土遺物



S10-400

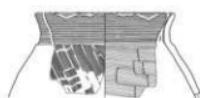


S10-200



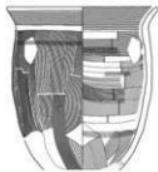
T10-300

S112出土遺物



T10-200

S166出土遺物



310-200



110-200



110-300

S172出土遺物



S10-300



410-200



210-200



110-200



110-300

2期堅穴住居跡
SI19出土遺物



SI2出土遺物



SI13出土遺物

SI18出土遺物



SI28出土遺物



SI40出土遺物



SI-121



第348図 各期堅穴住居跡出土遺物(3)

2期竪穴住居跡
SI19出土遺物



310-601

SI2出土遺物

SI13出土遺物



310-602

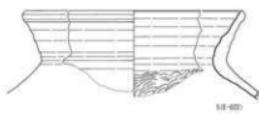
SI18出土遺物



412-900

SI28出土遺物

SI40出土遺物



310-603

3期堅穴住居跡
SI4出土遺物



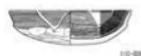
SI7出土遺物



SI17出土遺物



SI14出土遺物



SI30出土遺物



SI31出土遺物

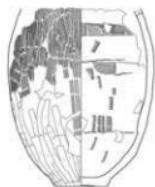


第349図 各期堅穴住居跡出土遺物(4)

3期竪穴住居跡
S14出土遺物



S14-01



S14-02



S14-03

S17出土遺物

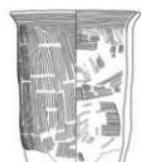
S17出土遺物



S17-01



S17-02



S17-03

S17出土遺物

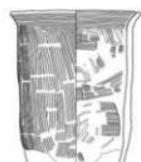
S114出土遺物



S114-01



S114-02



S114-03

S114出土遺物



S130-01

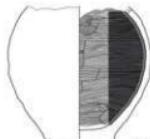
S130出土遺物



S131-01

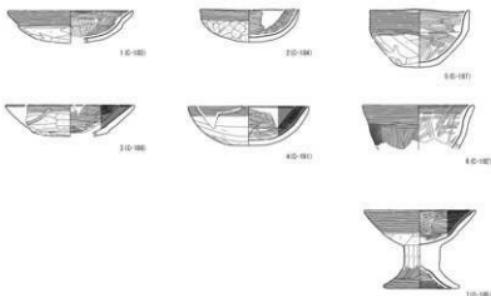


S131-02



S131-03

3期竪穴住居跡
SI49出土遺物



SI68出土遺物



SI75出土遺物



SI60出土遺物



SI63出土遺物

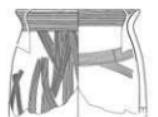


SI39出土遺物

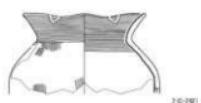


第350図 各期竪穴住居跡出土遺物(5)

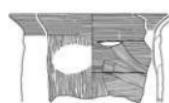
3期竪穴住居跡
S149出土遺物



S149



S168



S168

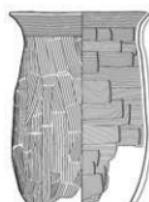
S168出土遺物



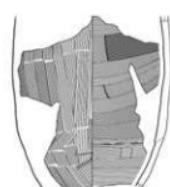
S175



S175



S175



S175

S175出土遺物



S160

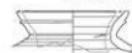


S160

S160出土遺物



S163

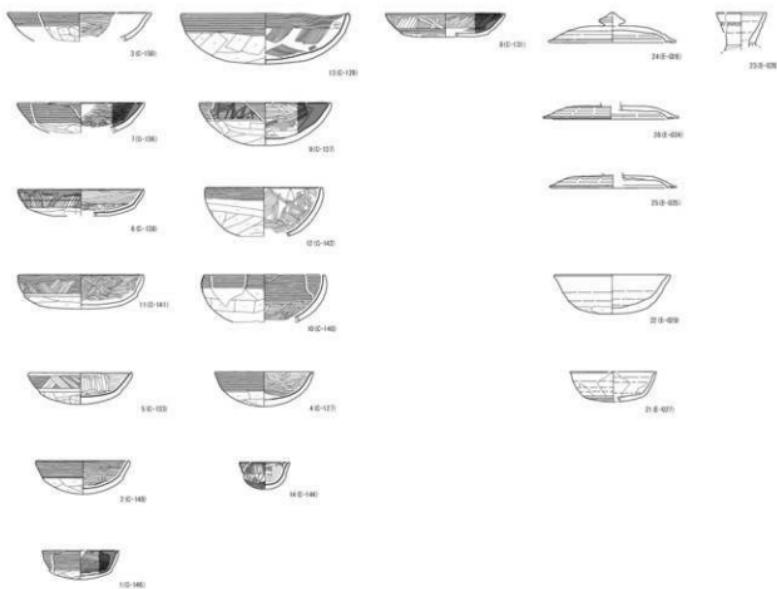


S163

S139出土遺物

4期堅穴住居跡

S144出土遺物



S158出土遺物

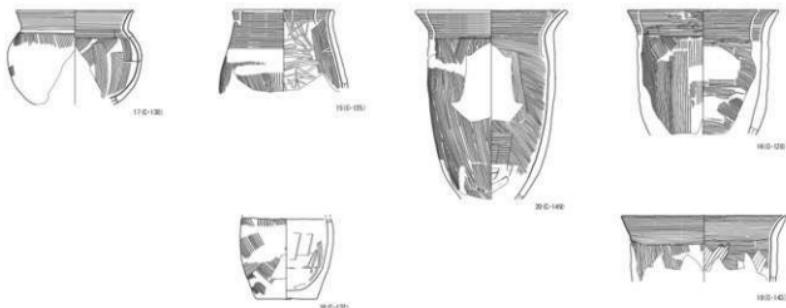


S162出土遺物



第351図 各期堅穴住居跡出土遺物(6)

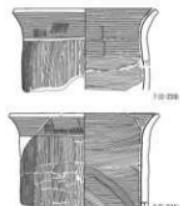
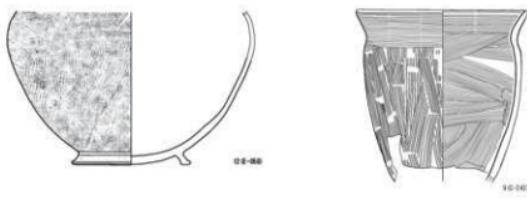
4期竪穴住居跡
S144出土遺物



S158出土遺物



S162出土遺物



4期竪穴住居跡

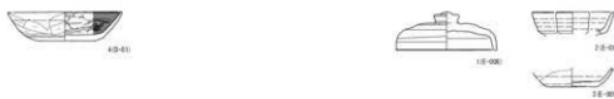
SI1出土遺物



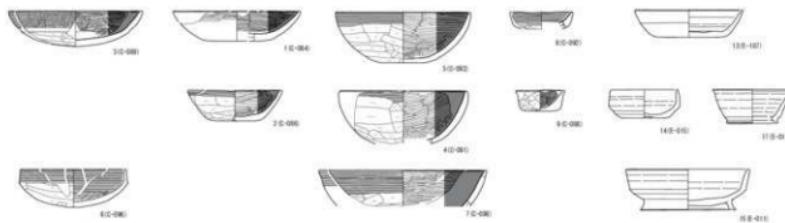
SI27出土遺物



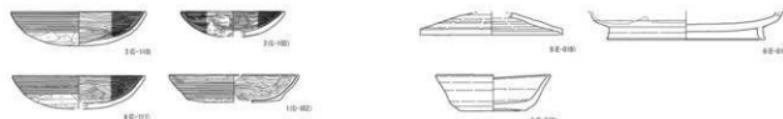
SI32出土遺物



SI33出土遺物



SI37出土遺物



SI38出土遺物

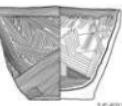


SI43出土遺物



第352図 各期竪穴住居跡出土遺物(?)

4期堅穴住居跡
SI1出土遺物



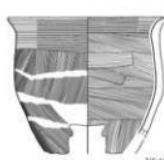
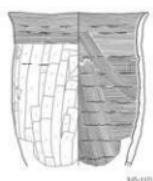
SI27出土遺物



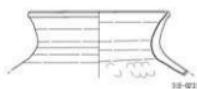
SI32出土遺物



SI37出土遺物



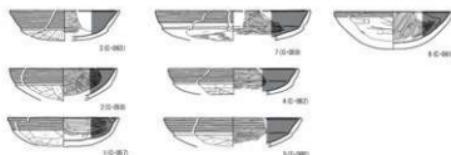
SI38出土遺物



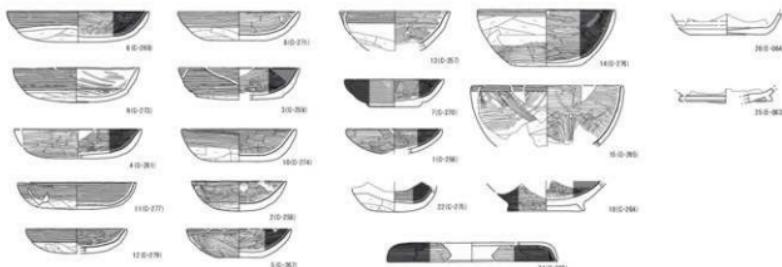
SI43出土遺物

4期堅穴住居跡

S126出土遺物



S164出土遺物



S147出土遺物



S148出土遺物

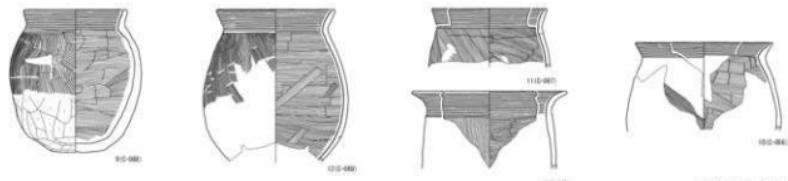


S153出土遺物

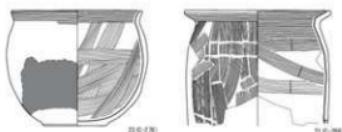
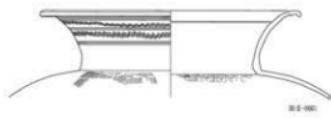
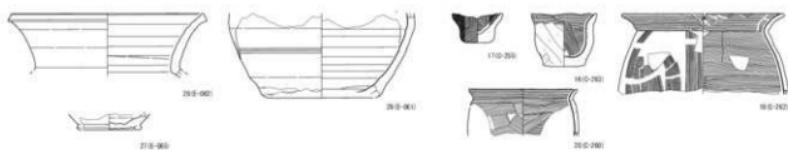


第353図 各期堅穴住居跡出土遺物(8)

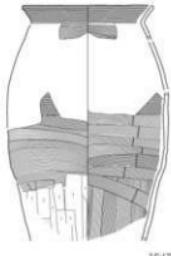
4期竪穴住居跡
S126出土遺物



S164出土遺物



S147出土遺物



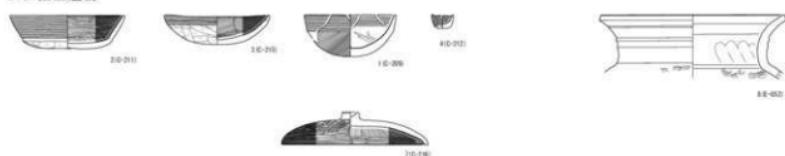
S148出土遺物



S153出土遺物

4期堅穴住居跡

S157出土遺物



S174出土遺物



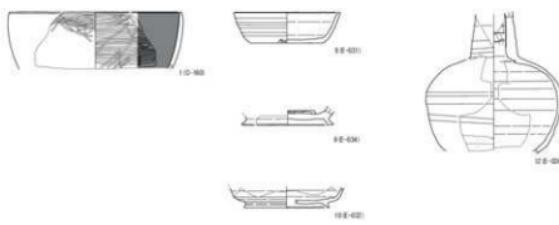
S156出土遺物



S165出土遺物

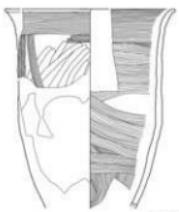


S145出土遺物



第354図 各期堅穴住居跡出土遺物(9)

4期竪穴住居跡
S157出土遺物



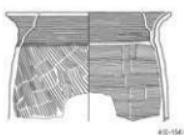
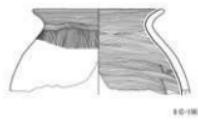
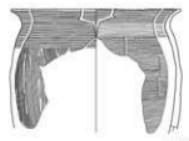
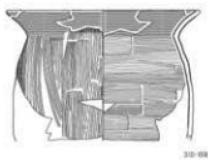
60

S174出土遺物

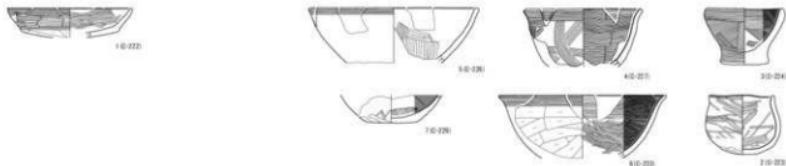


S156出土遺物

S165出土遺物



5期竪穴住居跡
S161出土遺物



S152出土遺物



S151出土遺物



S155出土遺物



第355図 各期竪穴住居跡出土遺物(10)

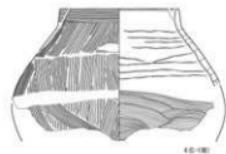
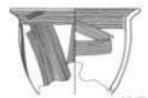
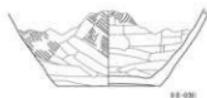
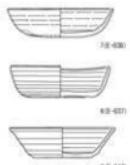
5期竪穴住居跡
S161出土遺物



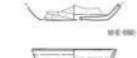
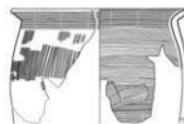
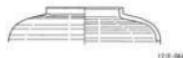
S152出土遺物



S151出土遺物



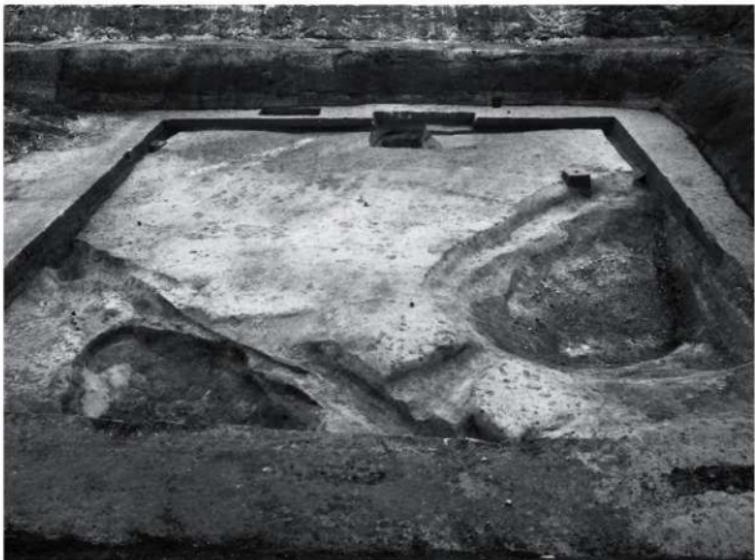
S155出土遺物



引用・参考文献

- 工藤信一郎他 「長町駅東道路第4次調査 仙台市あすと長町土地区画整理事業関係道路発掘調査報告書Ⅰ」仙台市文化財報告書 第315集 2007
- 長島榮一 「郡山道路発掘調査報告書 総括編」仙台市文化財調査報告書 第283集 2005
- 主浜光朗 「元袋道路 都市計画道路「川内・鴨生線」関連道路発掘調査報告書Ⅱ」仙台市文化財調査報告書 第272集 2004
- 工藤哲司 「鴻ノ巣遺跡 第7次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第280集 2004
- 佐藤 淳 「郡山遺跡 第124次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第251集 2001
- 荒井 格・赤澤精章 「高田B号道路」仙台市文化財調査報告書 第242集 2000
- 工藤信一郎他 「南小泉遺跡 第30・31次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第226集 1998
- 佐藤 淳・主浜光朗 「相ノ原・大貝中・川添東道路 国道286号線(赤石工区)改良工事関係発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第217集 1997
- 工藤哲司・赤澤精章他 「中在家南遺跡他 仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第213集 1996
- 長島榮一・福葉俊一 「〔1〕長町貨物ヤード跡地」「仙台平野の遺跡群Ⅲ－平成4年度発掘調査報告書」
仙台市文化財調査報告書 第170集 1993
- 長島榮一・福葉俊一 「〔3〕長町貨物ヤード跡地」「仙台平野の遺跡群Ⅳ－平成3年度発掘調査報告書」
仙台市文化財調査報告書 第162集 1992
- 工藤哲司・成瀬 茂 「栗遺跡 栗圓式土師器標識道路調査報告」仙台市文化財調査報告書 第43集 1982
- 古代城櫓官街道路検討会 「第34回 古代城櫓官街道路検討会資料集」 2008
- 佐藤敏幸・大久保弥生 「宮城県の湖西産須恵器」「宮城考古学」第9号 2007
- 東北古代土器研究会福島・宮城支部 「東北古代土器集成－古墳後期～奈良・集落編－〈宮城〉」 2006
- 中村 浩・望月幹夫編 「土師器と須恵器」「普及版・季刊考古学」 雄山閣 2001
- 古代の土器研究会 「古代の土器 I 都城の土器集成」 1992
- 東国土器研究会 「東国土器研究 第2号 特集 黒色土器－出現と背景」 1989
- 「東国土器研究 第3号 特集 黑色土器－展開と終焉」 1990
- 「東国土器研究 第4号 特集 東国における律令制成立までの土器様相とその歴史的動向」 1995
- 静岡県教育委員会 「静岡県の窯業遺跡(静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)」 静岡県文化財調査報告書 第42集 1989

写 真 図 版

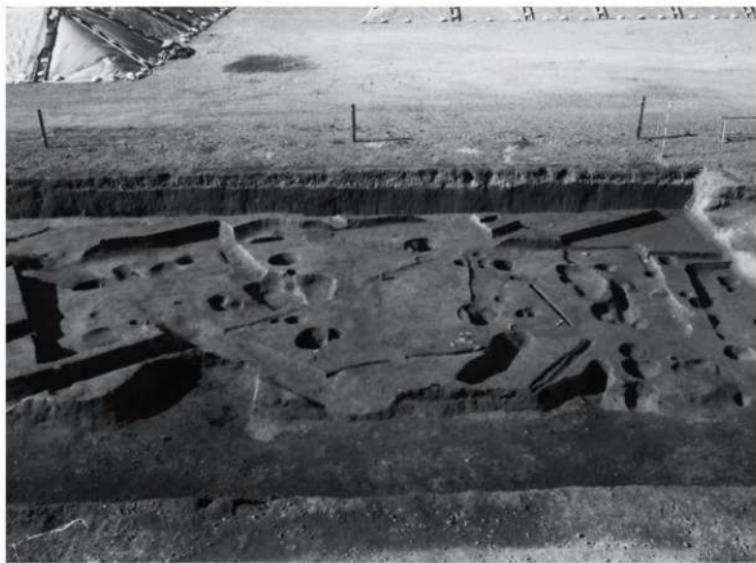


2A区全景



2B区SD全景

写真図版 1



2B区北部全景



2B区中央部全景

写真図版 2



2B区南部全景



2B区調査風景

写真図版 3



3A区北部全景



3A区全景

写真図版 4



2A全景



SD2·3·4断面



SD1全景



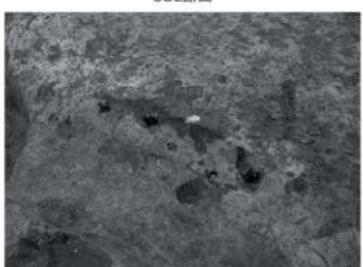
SD2全景



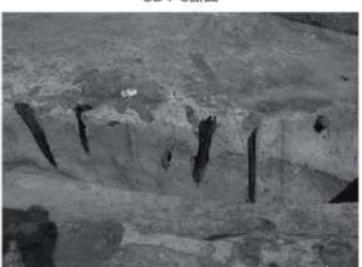
SD2断面



SD4·5断面



SD5杭列(1)



SD5杭列(2)



SD5杭列(3)



SD5杭列(4)



SX1全景



SX1断面



SX2遗物出土状况



SX2全景



SX2断面



SX3全景